

自然・人間・教育（その1）

— E. M. Forster の “The Machine Stops” という作品をきっかけとして—

長戸路 千 秋

Truly the garment had seemed heavenly at first, shot with the colours of culture, sewn with the threads of self-denial. And heavenly it had been so long as it was a garment and no more, so long as man could shed it at will and live by the essence that is his soul, and the essence, equally divine, that is his body. —E. M. Forster—

I 序 説

1. はじめに

E. M. フォースター¹⁾の第一次世界大戦前の作品の一つに、“The Machine Stops (1909)”（機械は止まる）という短篇がある。どんなに精巧な機械でも、人間が作ったものである限り、何時かは故障を起こして止まるものだという考え方が、このような題名を選ばせたものと思われる。彼は、ここで、次のような、今日の人間にとって、まことに戦慄すべきストーリーを展開している。

主人公は、もう中年を過ぎようとしている、ある女流音楽評論家²⁾であるが、彼女は、地下深くに蜂の巣のように秩序整然とたちならび、それへの大通りも小路も、さらには各部屋べやも、すべて記号や番号などで、がちりと合理的に整理されている八角形の一室³⁾に、ひとりで住んでいる、ま

るで菌類のような白い顔色をした一女性である。もっとも、これは彼女だけのことではない。ここではみんながそうなのである。また、大通りにも、小路にも、人影は見当たらない。なぜなら、ここではみんなひとりびとりで、地下深くにまで配置された部屋に住みながらも、殆ど完全に自給自足できるように、機械化が徹底しているからである。ここでは、よほど特殊な場合以外、一步も部屋を出る必要がない位に、機械化が進んでいるのである。食事も、研究も、リクリエーションも、病気の治療も、セックスも、いや、何もかもが、ボタンを押しさえすれば、すべてまかなえる仕組みになっているのである。ちょっとボタンを押せば、遠く地球の反対側の地下に住んでいる友人の、わが子の、その他あらゆる人びとの映像が、直ちにスクリーンに写し出されて、お互いに自由に話し合うことができる仕かけになっているのである。子供を生みたくなると、あるボタンを押せば、それが国家（それは、どうやら世界国家であるらしい）のある委員会室へ通じ、その委員会は直ちに、政治的に、かつ、優生学的に、「適当な」相手をさがし出して指定してくれるし、生まれた子供は、直ちに国家機関が収容して、これまた「適切な」養育をしてくれることになっている⁴⁾。成長して一人前となれば、地表下深くにまでぎっしりと建造されている、どこかの空き部屋を指定して、そこまで送り届けて住まわせてくれる。もしその場所が遠く距離をへだてているとすれば、“air-ship”（航空船）—ツェッペリンのような飛行船ではなく、今日のジャンボ・ジェットをさらに大きくしたようなものが考えられているらしい—で、一旦地表を運ばれ、そこから地下の、あらかじめ割り当てられている一室へ送り込まれる。親子がお互いに地球の反対側に住むようなことになるにしても、必要なボタンを押しさえすれば、自由に話し合えるのであるから、たいして不都合はない筈だということになっている⁵⁾。このようにして、生活のすべてはボタンを押すことで解決がつく。問題は、無数にあるボタンをどのように操作するかである。そのために、ボタン操作法の書物が必要となる。こ

の書物は、人間のありとしあらゆる欲求に応ずるための、極めて多数のボタン操作の説明書であるから、非常にぼう大なものとならざるを得ない。まずは、かつての、分冊以前の東京都の電話番号簿のようなものとなるのは止むを得まい。だが、このぼう大な書物が、人びとの部屋にある唯一の書物 “the Book of the Machine” であり、しかも、この書物こそ、この時代のすべての人間に幸福をもたらす唯一のものであって、彼等にとって、この書物はまさに聖書に該当するものであり、それ以外の書物は、一切不要であるばかりか、そもそもそれ以外のことを考えることさえ、異端であり、危険思想であるとされているのである。ボタン操作法を指示する書物が聖書に該当するものとすれば、その聖書が奉ずる神に該当するものは、当然「機械」でなければならない。中でも、普通一般の機械に何か故障が起これば、直ちに働き出す「機械を自動的に修理する機械」 “the mending apparatus” が、こうした「機械」一般の背後に構えていて、これこそ機械を支配する機械、すなわち、この時代の究極の神に当たるものなのであって、絶対に崇拝に値するものなのである。⁶⁾

さて、この作品では、いったい何故に人びとは、地上にではなく地下に住んでいるのであるか。それは人間が、地上で、その欲望を飽くことなく追求した結果、緑の地表を荒しつくし、傷つけつくし、搾取しつくして荒涼たる死の世界に化してしまい、さらに、有毒ガスを無暗に放出して大気を汚染しつくし、あげくの果てに地下に逃げ込み、「機械」によって「人工空気」の中で生存させてもらっているからなのである。⁷⁾かくて、この段階の人間にとっては、「機械」教が唯一の正当なる信仰であり、ボタン操作書である “the Book of the Machine” が、この信仰のバイブルであり、探険などのために地表に出ていくようなことは、特に政府から許可を受けたほんの少数の学者、その他の人たちに限られ、それ以外のもので、地上に思いをはせるようなことがあれば、その人は、「機械」(教)を

信頼しない「危険人物」とみなされ，“the homeless”という、「地下の世界から地上への追放」（それはここでは死刑を意味する）という刑罰が科せられる理由がわかるのである。ここでは、美しい自然とか、厚い人情を求めての旅などということは、最も危険な思想の持ち主だけが考えることなのである。各地域から地表の全域に亘って飛び交う「航空船」は、主として、国家の手で成長した子供たちを、それぞれ、前の住人が“euthanasia”（安死術）で死亡して、空き部屋になっているその部屋へ配置するために、やむなく地表の空中を運行しているに過ぎないのであって、この人たちが、飛行中地上を見たりなどして、それに対して「無用であるばかりではなく危険な好奇心」をいただくことのないように、それらの窓はすべて厚いカーテンでおおわれているのである。

さて、作者のフォースターは、以上のような趣旨を生き生きとした筆致で、主人公の女流音楽評論家とその一人の息子の生活を中心として画いていくのであるが、ある日突如として、主人公がボタンを押しても、機械がどこかトンチンカンな動きしか示さないのに気づく。そこで、当局に苦情を訴えても、「そのことは、いずれ中央委員会に伝えて決済をあおぐが、順番があるので、それまで待て」という返事がかえってくるばかり。「それでは、このような故障があちらこちらで起こっているのか」と聞けば、「そのようなことを聞くのは全く機械時代にふさわしくないことだ（not mechanical）」と、返答を拒否されるだけである。友人知己にこの話をすると、彼等もまた同じような体験を重ねているという。そのうち人びとは、次第に機械のそうした変調に、むしろ馴れてさえくるようになる。しかし、それでもなお、機械の動きは一向に改善される様子もなく、やがてますますその故障はひどさを加えてくる。こうなると、人びとの間に、「自動修理機械」は果して完全に働いているのだろうかという心配が話題にのぼるようになり、人びとの間に不安がますますつのってくる。ついにある日突然政府の発表がなされ、「自動修理機械」が少し故障を起してい

るが、間もなく完全に修理される筈であるから、それまで暫くの間、不便を忍んでもらいたいという。この卒直な政府の発表に、人びとは安堵のむねをなでおろし、政府に対して逆に信頼の度を深めることにさえなる。

ところが、こうした政府の発表にもかかわらず、諸機械はますます調子がおかしくなり、通信連絡はとだえがちになり、他の諸機械も同様に故障を起して、ついには、ボタンを押しても、ベッドも出てこなくなる始末となる⁹⁾。さらには、異様に鼻をつくにおいが部屋べやにたちこめ、飲料水として出てくる水も、これまた異様な味がする状態となる。そして最後にある日、突如あかりが一斉に消え、通信連絡は完全に途絶え、地下は全くの暗黒と化し、機械は到るところで猛烈な爆発音とともに崩壊し、異臭が人びとの鼻をつんざく。忽ちのうちに、人びとは恐怖のどん底に叩き込まれて、われもわれもと、普段は誰も通らない、いや、殆どその必要もない通路へ、大通りへと悲鳴をあげて殺到する。真っ暗なそれらの通りをひしめき合い、押し倒し合いながら、阿鼻叫喚の中を、地表へ通ずるゲートを求めて狂奔する。時々すさまじい轟音とともに地下壕の壁面が大きく崩れ落ちて幾千幾万の人びとを瞬時のうちに押しつぶしていく。機械の故障が連鎖反応を起して次から次へと崩壊していくのだ。生き残っている僅かの者たちも、すべて全身血だらけのすさまじい姿である。

奇跡的にも最後の瞬間まで、他の人びとより、より長く生き延びることができた主人公である母親と、その息子との間で取り交わされる対話が印象的である。

母親「地上にまだ生きている人びとがいるというのは本当？」

息子「僕は見たんです。話しかけたんです。僕はあの人たちが好きです。」「あの人たちは、われわれの文明が終りになるまで、霞の中や羊歯の茂みに身を潜めているんです。」

母親「ああ、何ということ！ だけど、何時か、——誰か愚かものが、また出てきて機械時代を始めるんじゃないの？」

息子「そんなことはありませんよ、絶対に!」,「人間はこれで大きな教訓を得たんですから。」

そして次の瞬間、この地下の全市街は二人を包んだまま、蜂の巣のようにひしゃげていった。

このような場景の描写で、作者はこの作品を結んでいる。人類終末の姿を、このような形で画いているのである。

まことに恐しいまでに現在の人間の、このままいけば必ずや陥るであろう姿の、少くともある一面を暗示しているといえないであろうか。この作者は、さらに別の作品、¹⁰⁾“The Other Side of the Hedge” (垣根の向う側)で、人間が、何の明確な究極目的もなく、遮二無二、まるで気違いのように、“forward! forward!” (前へ、前へ)と競争(emulation)で猪突猛進する姿を、読者に不気味さを感じさせる程、見事に描出している。おそらく、この作品は、作者にとって心理的には、前の『機械は止まる』と不可分の関係において書かれたものであろう。

このように、これらの作品によって、「前へ前へ」と競争の中で、ひたすらに科学に縋り、技術に頼って、合理主義の奴隷となって機械を神化し、自然を人間による征服の対象とのみ心得て、ますます自然を荒しつくし、結局は、唯一の頼みである機械神にも見放され、ついに自滅する人間の隣れにも愚かしい運命に、悲痛な思いをいただいている作者の人生観・世界観が、痛くわれわれに訴えかけてくるのである。

さて、私はここで、この作品の批評をする気持は毛頭ないし、また、専門外の私にできることでもない。ただ、私にとってひどく興味があるのは、この作品に現れた作者の人間観なのである。第一次世界大戦前(1909年)に書かれたこの作品に現れている作者のそれが、現在のわれわれに、何という恐しさを感じさせるものになっていることか、それが問題なので

ある。

作者は、この作品が収録されているペンギン叢書版、『短篇集』の簡潔な序文の中で、「これらの作品は、幻想（fantasy）に属するもの」であるとし、さらに特に、『機械は止まる』については、それがH. G. ウェルズのある作品に対抗して書かれたものであることを、一言つけ加えているのみである。しかしながら、この作品が発表された1909年当時ならば、確かに、作者自身のいう通り、一種の「幻想」としてすませしておくことができたかもしれないが、今日のわれわれにとっては、もはや、そのような悠長なことをいってはおれない程の恐ろしい、ある種の現実性を持ち始めているものであることに、われわれは特に注意しなければならない。

それは、今日のわれわれにとって、単なるファンタジー、ないし、S.F. の一種として読み過すには、余りにも不気味なものを内に秘めており、かくて今や、21世紀を旨とする人類への一大警鐘ともいえるべきものに化してきていることに、われわれは注目しなければならぬと思う。

ここにおいて、自然と人間との関係、ならびに、そこから必然的に引き出されてくる、人間にとっての「教育」や、それに関連する「学問」の問題を、根本的なところで考え直し、その本末をしっかりと正し、ここから、人間の如何に生きるべきかの根本的方策をしっかりと建て直しをしていくことが、喫緊の要務となってくるのである。

「自然」の問題、「人間」の問題、「教育」の問題、それらは、あまりにもぼう大であり過ぎ、したがって、その全体にわたって、細部にまで立ち入ることは到底筆者の力の及ぶところではない。ただ、考え方を、従来の学問の主流であった分析的方法によるのではなく、どこまでも大局的立場からする総合的な方法によって、それら相互の基底的な関係、ならびに、それらの重層的な構造を明らかにすること位は、可能であるし、また、それは根源的な道理の要求するところでもある。そして、そのためには、普通一般の平均的立場より、さらにもう一段視点を高くして視野を拡大し、

思考を単に平面的にではなく、立体的、動的にしなければならないことになるのである。

そのような意味において、以下引き続き、序説としての範囲内で、自然と人間と教育について、それらの最も基本的な諸点をめぐって、少しく予備的な考察をして置きたいと思う。

注 1) Forster, Edward Morgan 1879-1970 イギリスの小説家、批評家。
“A Passage to India”, “The Longest Journey”, “Where Angels Fear to Tread” 等の作品がある。

2) ここでは、仕事（職業）の専門化が徹底していて、例えば、彼女の友人に “specialist in sympathy” などというのがある程である。作者は、その作品のあちらこちらで、specialist という言葉を皮肉をこめて使用している。

3) 全世界全くの同一規格になっている。スペースの合理的使用の極致がこのようにさせているのである。同じ理由によって、ベッドの大きさも世界中全く同一規格である。

4) ここに、当時の養育ないし、教育の根本方針が、その前提として確立されているはずなのであるが、作者は敢てその点にはふれないで、ただ、皮肉をこめた筆致で、簡潔に、象徴的に叙述を進めていく。

5) もっとも、このような考え方に対し、主人公の息子は母親である主人公に対し、次のように抗議する。(アンダーラインは筆者)

“The machine is much, but it is not everything. I see something like you in this plate, but I do not see you. I hear something like you through this telephone, but I do not hear you. That is why I want you to come. Come and stop with me. Pay me a visit, so that we can meet face to face, and talk about the hopes that are in my mind.”

しかしながら、この時代の思想の堅固な支持者である母親は、これに応じない。

“The machine does not transmit nuances of expression. But it gives a general idea of people— an idea that is good enough for all practical purposes.” という考え方がその基盤に働いているのである。この時代

にあっては、せんさいな心の働きや情緒が持つ意義などは一切否定されているのである。合理主義と実用主義の組み合わせがこの時代に猛威をふるっているのである。(pp.21-22)

6) 徹底した合理主義、実用主義の時代であるから、宗教はすべて superstitionとして否定されているのであり、そうした superstition を否定

するところこそ、civilization の civilization たる所以があるとせられているのであるが、「機械が止まり」、人類が滅亡する直前には、ついに「機械」を公然と、「神」として崇拜するに到る心理的過程が、短い作品全体を通じてみごとに表現されている。

7) だから、この作品の主人公にとって、地上は嫌悪すべきもの、“I dislike seeing the horrible brown earth, and the sea, and the stars when it is dark.”であり、したがって、航空船で地表を航行するだけでも思考をみだす結果になるからいやだ、“I get no ideas in an airship.”ということになるのである。

8) 母親は、この時代の平均的人物、いや、むしろこの時代の合理主義、機械主義、実用主義の積極的推進者の一人であるように画かれており、その息子は、作者の代弁者として、真に人間的なるものを希求して、母親に悔悟をせまらせてやまぬ人物に画かれている。

9) これはいさか滑稽なことのようであるが、このあたりからヒューマニティーの崩壊が始まるのだと作者は考える。作者によれば、それは次のように展開する。

“But the discontent grew, for mankind was not yet sufficiently adaptable to do without sleeping. ‘Someone is meddling with the Machine—’ they began. ‘Someone is trying to make himself king, to introduce the personal element.’ ‘Punish that man with Homelessness.’ ‘To the rescue! Avenge the Machine! Avenge the Machine!’ ‘War! Kill the man!’”

10) E. M. Forster, Collected Short Stories (Penguin Books) 所収。

2. 自然について

遠い昔は別として、近代人、特に現代人は、軽卒にも、あるいはまた、不遜にも、「自然」を人間による征服の対象としてのみ見てきた。かくて人間はひたすらに、人間自身だけの利便のために自然に働きかけ、自然を虐げ、しかもなお、これをもって足れりとはせず、競争 (emulation) の形で猪突猛進し、ついには地上を完全な荒廃に帰せしめようとしてしまっているのである。

そもそも、どうしてこのようなことになったのであるか。それはほかで

はない。人間の、自然に対する態度の、ほんのちょっとした違いが、このような結果をひき起したといえるのである。元来、人間の自然に対する態度に、その観点の相異から、次の二つが考えられるであろう。

1. 自然を人間の単なる手段（征服の対象）と見るか、
2. それとも、自然を、人間を生み出し、さらにこれをはぐくみ育てる生みの親とみるか。

この二つの考え方の何れをとるかに従って、人間の自然に対する姿勢に決定的な違いをひき起す。

現代の大勢が前者であることはいうまでもない。自然をもって人間のための単なる手段（征服の対象）として受け取っているのである。そして、その結果は、極めて卑近な、数年前の一例を取り上げて見るだけでも次のように展開する。

駿河湾のさくらえびの漁獲高が近年めっきり減少したという。その道の専門家の意見によれば、駿河湾における生命の巡環過程は、植物プランクトンを動物プランクトンが喰べ、動物プランクトンをさくらえびが喰べ、そのさくらえびを一般の魚類が喰べ、さらにその魚類が死んで分解して植物プランクトンを養うという形で展開しているという。ところが、この生命の巡環過程に人間がはいり込み、これらの魚類を濫獲し、喰いつくし、その上に製紙工程から出てくるヘドロなどをさんざんに流し込んで、プランクトンはおろか魚類まで殺している。しかも他方において、パルプの原料として地上の森林を濫伐して、地表を裸にすることを急いでいる。しかも人間は、これによって実は己れ自らの生命を喰いつぶしていることに気づかぬ愚行を演じているのである。これは、われわれが最も身近に感じ取ることのできるほんの一例に過ぎないが、まさに一事が万事である。最近における石油を初めとする、もろもろの資源の減少、ないし、不足、さらに、それらの資源の利用過程において必然的に発生してくるもろもろの公害等が、どのようにわれわれ人間の生活に大きな影響を及ぼし始めている

ことかを考えて見るだけでもすぐわかってくることである。

かくて、ありとしあらゆる資源を濫費し、涸渇させ、大気を遠慮会釈なく汚染して、文字通り自らの生活を息苦しくしながら、しかもなお、前へ！前へ！と競争で歩を進め、近頃はそれに加速度をさえつけさせているに到っては、もはや何をかいわんやともいうべき狂気の姿である。自滅の道をまっしぐらに突進している姿、これを狂気の沙汰でないと誰がいえようか。しかも、その真只中に身を置きながら、それをもって当然のことだと思ひ込み、それがアブノーマルな心理状態だということには、一向に気がついていないのである。

しかし、これは自然を、人間の単なる手段、征服の対象と見る考え方の当然行きつくところであったのである。もうこの辺で人間が、己れと自然との関係を、あるべき位置において考え直すのでなければ、何時の日にか人類の自滅は必定であるという、まさにその危機にわれわれは臨んでいるのである。

そもそも自然とは何か。人間にとって自然とは如何なるものと考えらるべきなのであるか。

まず第一にわれわれ人間は、自然によって創り出されたもの、いわば、自然は人間の生みの親、はぐくみの親であり、従って、人間は自然の生みの子であることをはっきりと確認してかからねばならぬ。静かに落ち着いて考えさえすれば、一体誰がこのわかりきった根源的な事実を否定し得るであろうか。ある種の狂熱的な偏見に捉われている自然科学者か。だが、私はまだ、正気で断乎この事実を否定してかかるような科学者のあることを知らない。いやしくも正常な精神能力を具えている人である限り、このことを否定することはできない筈である。とすれば、自然は、名実ともに人間の生みの親、はぐくみの親であることに、いささかの疑問も残らない。

そもそも、人間はどのようにして自然から生み出されたか。それを分析

的にではなく（分析的に論じ始めたら、ついにはわけがわからなくなり、それでは永遠に結論は出てこない）もっと広い視野に立って、総合的に考え直してみることにしよう。

まず、宇宙それ自体の生成は、あまりにも問題が大き過ぎ、また、今日の科学の発達を以てしても、あまりにも、まだわからないことが多すぎる故に、ここでは一応除外して考えてもよいであろう。とにかくその中で、何十億年前にこの地球が生成された。そして、その後、有為転変の、いわば、猛烈な攪拌作用ともいべき動きと、それに基づくもろもろの融合分離作用の過程の中で、そのプロバビリティーを計算するとすれば、気も遠くなる程の、偶然のチャンスに恵まれて、最初の生命がこの地上に現れた。（実は、生み出されたのであるが、自然科学者は頑固にこの言葉を使いたがらない。）そして、そこから現代の科学が教える、あの複雑な過程を経て、その行きつくところ、その構造の複雑性（それは精神現象を伴う）の極致としての、したがって、まさに「万物の霊長」としての人間が現れたのである（実は、生み出されたのである）といわねばならない¹¹⁾。

この意味で、自然は人間にとって生みの親であり、いな、つきつめていえば、人間の生命そのものであるといわねばならない。このような意味を持つ自然を、単なる「人間的手段」、ないし、「征服の対象」としてのみ取り扱うことによって、果して人間は未来に永く生き延びることができるのであろうか。否、絶対にそれは不可能である。さきのフォースターの作品、『機械は止まる』の教訓を思いおこそう。何度もいうように、現在に到っては、それはもはや単なる幻想、ないし、S.F.の問題であるに過ぎないものとして放置しておくことのできない、まさに現代の人類への悲痛な警告となっていることに思いを致さねばならない。

自然は人間にとって、まさに、「生みの親」、さらには、人間の生命そのものとして取り扱われるのでなければならぬ。カントの「定言命法」をもじっていえば、われわれは、自然を単なる手段としてではなく、常に同時

に、目的として取り扱わなければならないのである。カントにおけるように、人格関係を、単に人と人との間にのみ限るのではなく、さらに自然と人間との間にまで拡大して考えなければならないのである。何故なら、自然は人間の母胎、いな、人間自身の生命そのものときさえいわねばならないものであるからである。

しかるに、現在の人間は、何故にこのような意味をになう自然に対し、かくも近視眼的であるのか。現代人は、まさに母胎を遠慮会釈なく喰い荒す愚かもの、いな、自分自身の身をさえ喰いかじる蝮にも似た憐れな存在となり果てているのではないであろうか。われわれは、今や何としても、そのような憐れむべき状態からの脱出をはかるてだてを見出すために、人智の総結集を図らねばならぬ事態に立ち到っているのである。われわれにとって、自然はまさに生みの親である。われわれは、そのことを十分心得た姿勢で自然に対すべく、渾身の力をこめてその一大転換をはからなければならぬ。それよりほか人間の未来にまで生き延び得る道、いわんや、繁栄の道はあり得ないからである。¹²⁾

花鳥風月、山水自然をこよなく愛でて、おのが生涯の友とし、それと親しみ、そのふところに抱かれて、そこにおのが生き甲斐を求め、さらには、それを神格化さえした、われわれの先祖たちの伝統はどこへ行ってしまったのであろうか。われわれは今一度、この美しい伝統に立ち帰り、その秘奥にまでくい入って、その魂を清める底の決意と、それにふさわしい態度がとられるのでなければならない。そして、それは今や焦眉の急といわねばならないのである。

私は、この意味でトインビーが、その生涯を通じて最も崇敬する人物として、アシジの聖フランチェスコをあげ、さらに、彼の最後の著述の書名を、“The Mother Earth”とした気持がわかり過ぎる程わかるような気がするのである。聖フランチェスコにとって、あらゆる人びと、あらゆる動植物はおろか、全自然が、彼自身と一体であり、彼自身の生命そのも

のであったからである。

これを要するに、自然は人間の生みの親である。自然はわれわれを生み出したもの、そして生かし続けてくれるまさにそのもの、もっとつきつめていえば、それはわれわれの生命そのものである。自然を畏敬しよう。それとの調和を謙虚に追求して生きよう。だが、そのためには、自然に対するわれわれの一般的な考え方、態度、姿勢を根本的に改めてかからねばならないのである。わかりきったことだということ勿れ。それが本当にわかっていないからこそ、人類の最も重大な危機の一つが、今日われわれの眼前に展開し始めているのである。このままいけば、フォースターにとっての「幻想」が早晚現実化、ないし、それに近いものになることは、まず間違いないところといえるのである。¹²⁾

注 11) 何故に自然科学者たちは、「現れた」という言葉に執着して、「生み出された」という言葉を使いたがらないのであるか。それは、おそらく自然科学者たちは、客観的であろうとするあまり、あらゆる価値観を徹底的に締め出そうとする無理な努力をする結果、「生み出された」という、幾分価値観をにおわせる言葉を忌み嫌うからであろう。実は、自然科学者たちといえども、根源的には一種の価値を前提として、その上に立って自然を探求しているのであるが。

あるいはまた次のような事情も考えられよう。もともと自然科学者たちは、自然をその研究の対象とするものであり、そのために自然をあくまでも客観的に見ようとするものである。そこまではよい。だが、これと同じ態度で、あたかも、自然一般が、人間一般の単なる征服の対象にすぎないものであるかの如く、人間を自然から截然分離して考えるあやまりにおちいりがちだからではないかと思われる。

私は、案外このようなところから、その後の人間の自然に対する態度に大きな転換がなされ、自然を人間の単なる手段であるかの如く取り扱うような姿勢を固定させていったのではないかと思う。

12) 前記のフォースターの作品において、この時代の人びとの間では、人間が自然の中へ出て行って自然を利用するどころではなく、自然をして人間のもとへ来たらしめて人間に奉仕させることが「文明」とさえされている。すなわち、“She had studied the civilization that had immediately preceded her own —the civilization that had mistaken the function of the system, and had used it for bringing people to things,

instead of for bringing things to people. Those funny old days, when men went for change of air instead of changing the air in their rooms!" p.115 (アンダーライン筆者) という次第である。この一事を取り上げるだけでも、思想や学問や教育が一步をあやまれば、それは人類にとって致命的な結果をひきおこすものであることを暗示しているといわねばならない。

3. 人間について

これまで述べてきたように、自然を人間の生みの親だとすれば、当然、人間はその生みの子であるといわねばならない。いな、自然の一部であり、さらにいえば、「自然」が自らを知る（自覚する）ために生み出した「自然の頭脳」ともいうべきものとして人間は存在するといわねばならない。何十年、何百年、せいぜい何千年、何万年くらいの狭隘な視野に立ってではなく、何十万年、何百万年、何千万年、いや、何億年、何十億年という、普通の人なら気も遠くなる程の、巨大な尺度で人間を観ずるとき（それは、古生物学や人類学が、そして地質学や天文学、さては宇宙進化論などが至極無造作に取り扱うスケールにおいてである）、われわれは、どうしてもそのような結論に達せざるを得ないのである。¹³⁾

人間はかくて自然そのものの、いわば、自覚的先端ともいうべき存在である。その意味で、人間は自然の粹であるといえる。だが、その「粹」なるものの生みの親は自然であり、人間はその生みの子である。人間は自然の精髓ではありつつも、それと有機的一体をなすその部分にすぎないものであって、その認識のために、方法論的には別として、両者を根本的に相対立するものとして考える如きは、まさにホワイトヘッドのいう「不幸な分離」にほかならず、あたかも「生木を裂く」に似た、生ける全体性破壊の道であり、実は、真理を求めて真理を殺す愚におち入るものといわねばならぬ。いわんや、実践上の問題として、自然の中に働く法則ないし理法

(今日までに人間が把握し得たものは、未だ「九牛の一毛」にも達していない位のものであろう)に真向から背反するようなことがあれば、遅かれ早かれ人間の自滅は必至といわねばならない。人間が自然法則(広義)に背反して生きられないものであることは、われわれが今日までに、既に明確に把握し得ている物理学的、化学的、生理学的諸法則などに、敢て背反してみる場合、その結果がどうなるかということから類比的に考えて見るだけでも直ちに明白になることであるからである。

そもそも人間は、*homo sapiens* として知性を持ち、さらに *homo faber* として自然に働きかけるところにその特質があるとせられてきたことは、既に周知のところである。だが、同時に、われわれは、その人間が、自然から生み出されてきたまさにそのものであること、従って、自然の理法(既知のものであると、未知のものであるとを問わず)に背反しては、所詮生きられない存在であることを軽視、ないし、無視すると、致命的な結果をひき起す。人間は、確かに、*homo sapiens* であり、*homo faber* であることによって、「万物の霊長」と考えられてきた。だが、ここでさらに一步を進めて、その万物の霊長である人間も、実は、大自然が生み出した一現象であるに過ぎないことにわれわれは心しなければならぬのである。

ティヤール・ド・シャルダンが、人間を、自然が生成する一現象として把握し、彼独自の超巨大視野に立つ人間観を展開した理由がここにあったのである。彼の主著“*The Phenomenon of Man*”(人間の現象)は、この意味で、古今未曾有の広大な立場に立つ人間観を、すでにその書名において端的に示しているものといえるのである。

「現象としての人間」、あるいは、「人間の現象」、ただし、現象であるにしても、その精粹ともいべき人間の姿。ここに人間独自の特性が輝く。

1. 人間、それは自然によって生み出され、自然を母胎とする、いな、

もっと徹底していえば、自然をおのが一大身体とする存在である。

2. 人間、それは自然によって生み出されたものでありながら、自然を知ろうとし、自然の中における己れの位置を、さらには、己れを包む大自然の意図をもさぐり出そうとし（人間の限度を知らぬ知識欲がこのことを語っている）、自然の意図を己れの意図として、自然に働きかけ、自然を改変させていくことの可能性を持つ存在である。ただし、この、人間をも含めた広大な自然の意図を謙虚に求めながらという立場に立ってではなく、狭い人間だけの視野に立って自然に対すれば、それは直ちに己れの破滅を招来する結果に到るものであることはいうまでもない。

3. 人間、それは個人であると同時に全体として自然から生み出されてきている。それは、個人としては死すべきものであるが、全体としてはかなりな永続性を持ち得るものとして生み出されてきている。ただし、人間が、人間を生み出した大自然の法則（理法）に背反しない限りにおいてのことではあるが。

4. 人間のメンタリティー、それは自然現象の精髓であって、ここにそれを持つ人間のメリットが輝く。ただし、人間自らがこれを曇らせず、どこまでもそのバランスをくずすことなく、健全にこれを成長させていく限りにおいてのことではあるが。

5. しかもなお、ある一面において、絶えずもろもろの悪をなし続ける人間、ありとしあらゆるエゴイズムを発揮し続ける人間、一体これはどのような自然の意図ともいふべきものを示す現象であるか。それは哲学上しばしば持ち出される難問の一つであって、軽卒な断定ははばかられるにしても、私としては、これまで述べてきたような立場から、おおよその見当づけとして次のようにいうことができると思う。

それは、個人であると同時に全体であり、全体であると同時に個人であるべき人間が、個人と個人との間に、そして、個人とあらゆる全

体との間に、さらには、あらゆる全体と全体との間に、真の動的バランスを求めつつ、しかもなお、それらの相互関係が複雑をきわめて、容易にそれに到達し得ないところに生ずる一種のひずみともいえるべきものといえないであろうか。いわば、このような形で、自然が人間にある種の警告を発しているのではないであろうか。俗に、「盗人にも三分の理」ということばがある。このことばが、意外にも深くこのような事情を語っているものといえないであろうか。そしてまた、「罪をにくんで人をにくまず」ということばも、この事態と密接な関連を持つものといえないであろうか。

以上要するに、人間は自然の生みの子、いな、その寵児であって、自然を以て究極の自然たらしめるべく、自然によって生み出された存在であり、しかもそれは、単に個人としてのみではなく、同時に人類全体として完成すべく生み出されてきたものであり、自然それ自体が、その激しい動きの中で分解し、拡散しつつ、しかもなお、生命を生み出し、それを育て、ついには人間を育成し出すという収斂の度を重ねていくのと同様に、人間自身もまた、エゴイズム、ないし、悪にもとづく相互憎悪によって、背反し、分離し、拡散しながらも、なおその社会化の歩を進め、今日ではそれにもとづく知識の大規模な結集によって巨大な力を発揮し（例えば、ビッグ・サイエンス— 一種の社会化）、その究極において人類共同体の如きものを志向しながらも、現在その一步手前で、国家的、民族的、大国的エゴイズム等によってはばまれ、他面、自然を痛めつけ過ぎた報復を受けて、いわゆる公害や資源不足などの前に立ちすくんでいる状態にあるといわねばならない。

しかしながら、ここまでくれば、少くとも理論的には、今後の人類のおもむくべき道はおのずから明らかである。人間と自然との融和、人間関係における融和、この二つあるのみである。それらは、今日の人間にとって、ある意味においては Sein でありつつも、同時に Sollen であるとい

わねばならない。何故なら、人間は、これらによって現在まで生き得てきたのであり、さらに、これらに向って無限の努力を重ねていくよりほか、未来に亘って生き延び得るすべを知らぬものであるからである。

われわれは、人間をも含めたこの広大な生ける全体性、天地宇宙、大自然の心をおのが心として生きるのだからならぬ。そのためには、自然への愛、ならびに、人間への愛の普遍化、徹底化のほかには人類の未来にまで生き延び得る道は考えられない。かくて、今や人類は、自然との融和において、個人が全き個人として生かされるところの、全き全体を作りなすべく、愛の努力を無限に重ねていくほか如何なる生き延び得る道をも考え出すことはできないというところまで押しつめられてきているといえるのである。

まことにカントのいう通り、人類はまだ若い。現在の人類の前途に、どのような苦難が横たわっていようとも、いつの日にか上述の人類の完成に到達すべく、われわれは無限の努力を重ねていかなければならない。人類の歴史を巨視的に見るとき、これは否定し得べくもない真実といわなければならない。

進化の科学の立場からいっても、人類の出現は、巨大な自然史の立場から見るとき、まだまだ生まれたばかりである。人類はこれまでの生命の進化の先端に立っているとはいえ、この巨大な進化の過程の中では、まだまだ初期の段階にあるに過ぎない。現在におけるように、ありとしあらゆる形における憎悪に妨げられながらも、その彼方に、愛と知の結集によって究極の境地を達成すべく、無限の努力を重ねるのでないならば、人類がこの地上に創り出された意味がないであろう。

注 13) Teilhard de Chardin (1881-1955) の立場

かげろうの「かげろう的視野」があるとするれば、われわれはそれを嘲笑するであろうように、天地宇宙という巨大な生ける全体性の立場に立てば、普通の人間的視野は、笑うべく狭い視野であるといわねばならないであろう。だが、人間は、その理性を駆使することによって、このよ

うな巨大な視野に立つこともできるのである。人間を「自然の頭脳」という所以である。

4. 教育ならびに、それと密接な関連を持つ学問について

自然と人間の関係が以上の如くであるとすれば、そこから直ちに、人間が未来にまで生き延び得るがための必須の条件として、教育、さらには、学問の姿勢如何が問題となってくる。なぜなら、教育や学問は、実に、人間をして人間たらしめたまさにそのものであり、また、未来に亘っても、そのような機能を発揮させ続けなければならぬまさにそのものであるからである。

そもそも、生物学的にいて、あらゆる動物の中で、最も不完全で未熟な状態で生まれてきた人間¹⁴⁾が、それに比例して未成熟な、両親から受け継いだ遺伝的なものだけの導きによらないで、その不足分を、後天的な「教育」(一種の社会的遺伝 — その基盤に学問がある)によって補充し、これによって、未来への発展によりふさわしいものを効果的に獲得させていけるところに、人間のすぐれた特質があるということが、今日、進化の学問上いえる段階に達しているのである。

教育や学問は、人間にとって、まさにこのような意義をになうものである。ここに、人間をして、いわゆる「万物の霊長」たらしめた秘密の、根源的なものの少くともその一つが見出される。この意味で、人間において教育や学問の果す機能はおそろしい程重大であるといわねばならない。最も未成熟な状態で生まれてくることの補充を、逐次必要に応じて改善し、深化させていくことの可能な教育や学問を以てすること、ここに人間のすぐれた特質が輝きを発揮する。他の動物は、人間よりはるかに成熟した形で生まれてくる代りに、その後、生活の大部分を本能に依存して、結局、その狭いわくの中で生き続けていくのと比べてみると、これは何という大

きい違いであろうか。フーブルを初めとして、多くのその道の専門家たちが教えてくれるところの、あの恐ろしい程の精妙さを持ちながらも、同時に、考えるだけでも息苦しいほど狭い本能の袋小路の中にとじ込められて、うごめいている昆虫の世界を考えよう。また、人間の3,000倍もあろうという嗅覚に恵まれた代りに、するどすぎる嗅覚の狭い袋小路の中に躊躇している犬の世界を考えよう。その反対に、最も未成熟な状態で生まれながら、本能の変化に比べれば、極めて短期間の試行錯誤（模索）の過程を通じて、いな、加速度を加えつつ、よりよき生への方向を志向し、それを着実に実行していくための最も有効な手段となっている教育や学問は、人間の営みの中でも何という重大な任務を負わせられていることであろうか。しかしながら、同時に、その反面において、一步を誤れば、人類をして自滅に導くかも知れぬ程の危険を内蔵する教育や学問であってみれば、教育や学問に従事するものの責任の重大さは、計り知れないものがあるといわねばならない。この論考のきっかけとして取り上げた、さきのフォースターの作品において、作者によってさりげなく叙述されているところの、当時の人びとのものの考え方の方向や、その動きのあとを辿るとき、近視眼的にも生みの親たる自然を、人間による征服の対象としてのみ見る（注12）参照）軽薄極まる教育的、学問的な姿勢から出発して、ついには恐るべき「機械崇拜」、極端な合理主義、全体主義、劃一主義、個性無視、感情や情緒の否定、さらには、機械信奉にもとづく強健な体力の否定にまでおちいり、かくて、魂をしいたげ、身体をしいたげ、しかも、そうすることを以て、「文明」とする恐るべき世界をひたすらに志向して、ついに滅亡する人間の姿を思うとき、私はここに教育や学問の、一步誤れば、人間に及ぼす結果の重大性に慄然たらざるを得ないのである。かくて、今や、教育にとっても、学問にとっても、如何に教育し、如何に学問をするかということよりも、何を教育し、何を学問するかという根本的な問題に取り組むことの方が、より重大な、そして、より緊急の問題となってきた

いるといわねばならないと思う。

以上これを要するに、自然の理法と人間の理法は、実は同一物の二面にほかならない。あるいは、いかえれば、人間の社会法則（広義のそれ — 道徳の問題をも含む）の基盤に自然法則（広義のそれ — 人間にとって未知のものをも含む）が働いているといってもよいであろう。この立体的、動的構造を忘れては、あるいはそれに気づかなくては、人間は認識（学問）を誤まり、実践（教育）を誤まる。それは人間の破滅につながる根本的な重大事なのである。教育と学問の、人間にとって異様ともいえる程の重要性がここにのぞき出しているのである。

以上、はからずも、E. M. フォースターの短い一つの作品が筆者を刺戟して、自然と人間と教育の問題を、それら相互の密接な関連において、根本的に考え直してみるきっかけを与えてくれた。

ここに私は、以下章を改めて、この問題を、先人たちの思考のあとを参酌しつつ、より具体的に、かつ、より詳細に展開してみたいと願うものである。それがどこまで可能であるか。あるいはして、せいぜい単なる試論に終るかもしれない。しかしながら、人類の現状において、それは義務である。なぜなら、「世界は、われわれ人間が創り出していくまさにそのものに外ならない」（Die Welt nur dasjenige sei, wozu wir sie machen.）Kant, Werke [Akad. = Ausg.] XV S.90. からである。

注 14) ポルトマンはこの事実を動物学的にたんねんに実証した。『人間はどこまで動物か』。

15) テイヤール・ド・シャルダンが最初にこのことを強調した。『人間の未来』。